

59 航于米國艦中賦古詩 勝海舟

紙本墨書 一三七・五×五八・三  
明治五年（一八七二）頃

本幅は、幕末の幕臣である勝海舟（一八三〇―一九〇九）の七言古詩である。詩題は、万延元年（一八六〇）に日米修好通商条約の批准書交換のため、咸臨丸の艦長として太平洋を横断する前年に作られたもので、サンフランシスコへの航海を軽妙に、かつ『莊子』にみえる巨大生物の鯨と鵬に例えて力強く表現している。一方で、「碧眼士」（西洋人）が世界の至る所をその目で見て世界を広げているのに対し、我が国の人々はなぜ小さく縮こまり、疑い深くなっているのかと嘆く。その上で、自身は海軍技術の見識を深め、天下の基礎を定めたいと決意表明した、意気込み溢れる内容となっている。しかし、本幅の揮毫は後年であり、落款から判断するに明治五年（一八七二）頃の作と推定される。

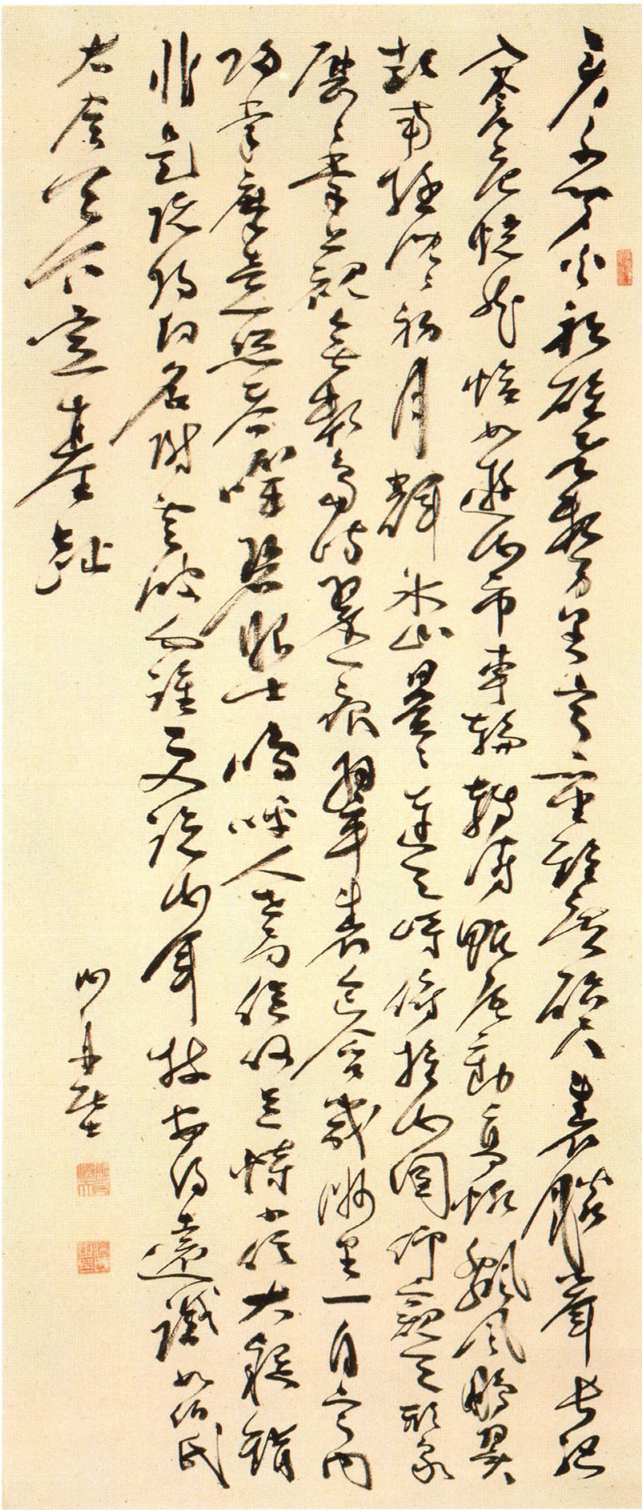
勝は、母親や伯父で書家の男谷燕齋（一七七七―一八四〇）の影響で、王羲之を始めとする書法を学び、また書の鑑賞を通じて目習いを行った。勝は、書に対して「寝ころんでまでも書いた」、「性来書画は大嫌いだ、別に手習いなどした事がない」と諧謔を弄しているが、その反面、「書は其の人の心を写出したものだ」との持論を展開している。書に対する彼なりの深い考えが確立していたことは、その書法が速筆で流れるようでありながら、気脈が一貫し、均斉がとれているという特徴にも表れている。スケールの大きい本幅も、自在に流れる筆運びが、かつて大海原を航海した咸臨丸を連想させるかのようである。

本幅は昭和三年（一九二八）に田中光顕が献上したものである。

一幅（三の丸尚蔵館）

君不聞火船雄飛數万里、宇宙雖広咫尺裏、颯拳長驅  
入蒼茫、恍然恰如遊海市、車輪輻濤鯨尾動、高帆飄風騰翼  
起、南極沈沈初月輝、氷山墨々連天時、俯推海國仰窺天、形象  
歷々掌上視、無數島嶼翠一痕、翠裏包含幾洲里、一自宇內  
歸掌摩、竟恣吞噬碧眼士、嗚呼人世局促何足恃、小信大疑錯  
非是、既將功名附雲波、向誰更說海軍技、安得遠識如伯氏、  
大今天下定基趾、

海舟居士



- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

## 書の美、文字の巧

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 74

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

宮内庁書陵部

制作 株式会社 東京美術

翻訳 黒川廣子

発行 宮内庁

平成二十八年九月十七日発行

© 2016, The Museum of the Imperial Collections, Sanmonmaru Shozokan  
The Archives and Mausolea Department  
Imperial Household Agency